

論争作品に見られる自伝的側面

—ジャン=ジャック・ルソー『ボームンへの手紙』と『山からの手紙』についての考察—

土 橋 友梨子

[キーワード：①論争作品・自伝的作品 ②『エミール』断罪 ③「誠実さ」 ④「歪曲」]

1. はじめに

1762年6月9日、『エミール』*Émile ou de l'éducation* (1762) に焚書処分
の命令が出された。そして、このような「危険な書物」を出版したとい
う罪で、その作者であるジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau
(1712-78) にも逮捕命令が下された。逮捕の危険にさらされたルソーは、
庇護者であるリュクサンブール元帥のもとを去り、フランスのモンモラン
シーからスイスのベルヌ領のイヴェルドンに着のみ着のまま向かわなけれ
ばならなくなる。その後、フランスに身を落ち着けることができるように
なるまで、迫害に次ぐ迫害、放浪に次ぐ放浪を彼は余儀なくされること
になる¹⁾。

ルソーは『告白』執筆以前にも、自伝的断章である『わが肖像』*Mon
portrait* (1756?-62) や『マルゼルブへの手紙』*Quatre lettres à M. le prési-
dent de Malesherbes* (1762年1月) のような自伝的作品を書いていたので

あるが、この「事件」後の1764年の春頃から、本格的に『告白』*Les Confessions* (1764-70年執筆、死後出版、1782年に第一部、1789年に第二部刊)を執筆し始めている²⁾。彼の回想録に対する試みは、『告白』執筆から遡ること約七年、すでに1757年頃からルソー全集の巻頭に載せるために、オランダの出版者であるマルク＝ミシェル・レーとの間で進められていたとされているが³⁾、『エミール』断罪という大事件と、匿名中傷パンフレット『市民の意見』*Le Sentiment des citoyens*⁴⁾ (1764)の公刊が、『告白』という回想録を執筆し、それを出版しようというルソーの意志をより強固にさせたと考えられる。

本稿では、『告白』以前に書かれた自伝的作品ではなく、『エミール』断罪後の混乱の中で書き進められた『ボーモンへの手紙』*Lettre à Monseigneur de Christophe de Beaumont* (1763)、『山からの手紙』*Lettres écrites de la Montagne* (1764)という論争作品にみられる自伝的な側面について考察してみたい。なぜならこれらの作品、とりわけ『ボーモンへの手紙』という論争作品の執筆が、『告白』を書くうえで大きな契機となっていることが、エルミーヌ・ド・ソシュールやジャン＝マリー・グールモの研究によって明らかになっているからである。

『告白』執筆の年代を書簡などから明らかにしようと試みたソシュールは、『エミール』の後に書かれた作品は「私的・個人的」(« personnelle »)なものであり、それは『エミール』印刷中に書かれた『マルゼルブへの手紙』がきっかけとなったという。彼女はルソー作品について、『エミール』までを「第一期」、『マルゼルブへの手紙』を経て、『ボーモンへの手紙』からを「第二期」と呼んで両者を区切っており、『告白』が書かれるためにはこの区切りがなくてはならなかったと分析する。つまり、1764年末に『市民の意見』が出版されたということだけではなく、1762年の『エミール』断罪が『告白』を執筆するうえで大きな契機となったと主張して

いるのである⁵⁾。

また、グールモはソシュールよりも明確に、1762年以降のルソー作品には自伝的な色調が強く示されていることと、さらにその点に関して、『ボーマンへの手紙』がこれまでの作品と一線を画していることを明らかにし、以下のように分析している。

『ボーマンへの手紙』を通して、ジャン＝ジャックは真理を述べるのではなく、高位聖職者によって歪められた彼という人間と彼の考えの誠実さ〔本質、真実〕を回復させるつもりである。[…] この『手紙』の冒頭から、言うべきことの要点が「運命の特異さ」であることは象徴的である。[…] 何よりもまず、差し出された命題の真の特徴を強調するのではなく、話し手〔ルソー〕の誠実さを強調している⁶⁾。

つまりこの『手紙』以降ルソーは、作品のなかで彼がこれまで辿ってきた数奇な運命——人生——を語り、彼自身の「誠実さ〔本質、真実〕」（« la vérité »）を問題にし始める、とグールモは分析していることになるのである。

しかしながら、論争作品が「自伝的」であるかどうかを考察するとき、ルソーの「誠実さ」にばかり目を向けていればよいのだろうか。つまり、ルソーがどのように「歪められた」のかということも同じように考察の対象にすべきではないだろうか。なぜなら、人から「歪められる」という事態がなければ、彼は自分の「誠実さ」を回復する必要はないからである。そこで本稿では、まず「歪められる」ことが自伝的作品——ここでは『告白』——執筆にとって重要な意味を持つことを示し、『エミール』断罪後の二つの論争作品で、ルソーが「歪められた」ことをどのように主張し、描き出しているのかを、「歪曲」という言葉を用いながら分析する。そう

することで、「歪曲」されるということが、「誠実さ」と並んで論争作品に見られる自伝的な一側面であることを明らかにできるだろう。

2. 論争作品と『告白』との関連性

はじめに、「歪曲」されるということが自伝的作品を執筆する際にいかに重要なタームであるかを『告白』から示そうと思う。ルソーは、『告白』の第十巻で回想録執筆について以下のように述べている。

どういう気まぐれからか私には分からないが、レーはずっと前から私の人生の回想録を書くことを勧めていた。この回想録が事実としてはこれまでのところあまり関心に値するものではないにせよ、私がそこで書き得る率直さによっておもしろものになるに違いないと感じた。私は今までにない真実性によって特異な本を書こうと決めた。そうすれば少なくとも一度は、ひとりの人間の内面をありのままに見ることが出来る。[…] 私は公衆の間で、自分とはまったく似ていない姿で、ときにはあまりに歪んだ (« diffformes ») 姿で描かれているので、私には隠しだてしようなどというつもりもない欠点があったが、ありのままの私 (« tel que j'étais ») を示すことはなおも得にしかならないことを分かっていた。 (*Les Confessions*, Livre X, OC, I, pp. 516–517.)⁷⁾

この引用には、「歪んだ」 (« diffformes ») と「ありのままの私」 (« tel que j'étais ») の対立が見られる。この対立は、ルソーが作家になって以来、公衆によって「ありのままの私」とはまったく異なる「ルソー」をつくり出されていたことに対する彼の意識の提示といえる。『告白』執筆について、作者自身がこの対立を際立たせながら述べているということは、人から描かれている「まったく似ていない […] 歪んだ姿のルソー」と「あり

のままの私」ととの間に生じている齟齬が、彼にとっては回想録を書くことを決心する上で、強い効力を持ち得るものであると考えられるのである。

「ありのままの私」と「人から描かれた私」という対立は、ジャン・スタロバンスキーに倣うと、「*être*」（「存在」）と「*paraître*」（「外観」）の対立のうちのひとつということになるだろう。『透明と障害』（1957）の第一章で、スタロバンスキーはルソーを自他共に作家と認められるものにしたデビュー作である『学問芸術論』（第一論文）*Discours sur les sciences et les arts*（1750）の時点から、彼の作品にはこの「存在」と「外観」の不調和が見られると分析している。「存在」と「外観」、これら二つの間に生じる齟齬はルソーにとっての不幸を生み出すが、自分自身を描いている『告白』もこの例に漏れない⁸⁾。だからスタロバンスキーは、『告白』の第一巻にある「折れた櫛」のエピソードを用いて、ルソーが『告白』で描いた幼きルソーにも「無実な存在と罪ある外観」（«*l'être-innocent et le paraître-coupable*»⁹⁾）を見出しているのである。

また、アラン・グロリシャルは、会話が重要な役割を担っている18世紀の社交界において、会話の苦手なルソーが話すことによっても、黙っていることによっても本来の自分を示すことができず、人から「愚か者」と見做されることや、パリを離れて森で暮らしているルソー本人と、公衆がパリで勝手につくり出している「ルソー」という対立を、『告白』やその草稿から分析し、ルソーにとって「不幸のうち、最大のものは変身させられる（姿を変えられる）こと（＝「人から描かれた私」）」（«*parmi ces malheurs, le pire est s'être vu métamorphosé*»¹⁰⁾）であると述べている。だから、この「不幸」をなくすために、ルソーは自分が「歪曲の企ての無実の犠牲者（＝「ありのままの私」）」（«*l'innocente victime d'une entreprise de défiguration*»¹¹⁾）であることを、『告白』で書かなくてはならないというのである¹²⁾。

ここでは「罪ある外観」、「愚か者と見做されること」、「勝手に作り出されたルソー」が示しているように、「外観」には多数のルソー像や、彼を歪める方法を見いだせる。「ありのままの私」が一義的であるなら（これはルソーの幻想に過ぎないのかもしれない）、「人から描かれた私」とは多義的なのである。

幾分か時を経た研究から、近年の研究に至るまで問題にされ続けているこの主題は、ルソー研究において古めかしいというよりもむしろ、ルソーと彼の作品理解において最も重要な地位を占めているもののうちのひとつであると言えるだろう。つまり、一見単純に見えるこの二項対立は、ルソーが『告白』という自伝を書く際に極めて重要になってくるのである。そのうえさらに言うならば、人が「ありのままの私」を「歪める」(« défigurer »¹³⁾) という問題は、『告白』だけでなく、『告白』の後に書かれる自伝的作品『ルソー、ジャン=ジャックを裁く—対話』*Rousseau juge de Jean-Jacques. Dialogues* (1772-76年執筆、1780年刊)で、「ルソー」、「フランス人」、「ジャン=ジャック」の三人によって、より複雑に論じられることになるため、「歪曲」の問題は作品が「自伝的」であるかどうかを考察するうえで欠かせない事柄であると言えるのである。

3. 論争作品に描かれる『エミール』以前の「歪曲」

ここで、本稿で論じる論争作品について少し触れておきたい。『ポーモンへの手紙』は、パリの大司教であるクリストフ・ド・ポーモン *Christophe de Beaumont* (1703-81) による教書 *Mandement*¹⁴⁾ (1762年8月20日) に対して書かれ、1763年3月に出版された。ルソーはパリの大司教であるポーモンという、自分よりも数段身分の高い人物に対して、自分自身の「無罪」を証明するために、この手紙のなかで自己弁護を試みなければならなかったのだった。

また、『山からの手紙』は匿名の作品『野からの手紙』 *Lettres écrites de la Campagne*¹⁵⁾（1763年9月）に対して書かれた。この論争書は『ボームンへの手紙』に比べると非常に長く、第一の手紙から第九の手紙までで構成されている。ルソーは無罪潔白であることを自分自身で証明したあと、もしも仮に自分が有罪であるとするなら、いかに裁かれるべきかを述べ、ジュネーヴ政府が今まさにルソーに対して行っている裁きの不正（性）を暴きだしている。また、思想的な側面から考えれば、この作品は『エミール』第四篇に収められている「サヴォワの助任司祭の信仰告白」 *Profession de foi du Vicaire savoyard* での宗教や、『社会契約論』 *Du Contrat Social*（1762）の政治思想、そしてジュネーヴの歴史と絡み合い、複雑な論理展開をしている。かつて、ジュネーヴにとって有益な作品である『ダランベールへの手紙』 *Lettre à M. d'Alembert sur les spectacles*（1758）を書き、ジュネーヴを救ったと自負しているこの「ジュネーヴ市民」は、今回は犯罪者の汚名を着せられてしまった。彼は絶対的に無罪を信じているにもかかわらず、法廷で争わなければならない状況に陥っているのである。

『ボームンへの手紙』と『山からの手紙』は、実際は論争作品なのだから、論敵たちによって非難されている『社会契約論』や『エミール』を「正当化する justifier」ことが真の目的である。ところが、ルソーはこの二つの作品で以下のことを繰り返し述べている。

もしあなたが私の本（« mon livre »）しか攻撃なさらなかったのであれば、私はあなたに言わせておいたでしょう。しかしあなたは私という人間（« ma personne »）も攻撃していらっしゃいます。[…] (*Lettre à Beaumont, OC, IV, p. 927.*)¹⁶⁾

『学問芸術論』の成功後、作家として一躍有名人となったルソーは、激し

い論争の渦のなかに投げ込まれた。多くの読者らが第一論文を攻撃し、作者であるルソーを論駁するための論争文を送ってきた¹⁷⁾。それらの論争文に応じていくうちに、彼は論争家^{ゴレミスト}としても才能を開花させていったのだった。また、その当時送られてきた論争文の一つであるポーランド王からの手紙は、彼を満足させた。なぜなら王という高貴な身分の人間が、一介の作家でしかない自分を論敵と見做し、意見を述べてきたからである。ところが、同じく高貴な身分に属するポーモンの攻撃に対しては、彼はかつてのような名誉を感じていないだけではなく、反論することさえ拒もうとしている。しかしルソーは自分が無罪であるにもかかわらず、ポーモンが不当にも「私という人間」までをも攻撃していると反論しなければならない。では、「人から描かれた私」はどのように「歪曲」されているのか。

[…]、あなたは親切にも私の肖像を描かれた。そこでは司教的な厳肅さが、さまざまな対照法を楽しみ、私は非常に滑稽な人物になっています。猥下、この個所はあなたの教書のなかで最も素晴らしい部分であるように私には思えます。これ以上愉快的な風刺文を作ることはできないでしょうし、これ以上の才知でもって一人の人間の名誉を傷つけることもできないでしょう。(Lettre à Beaumont, OC, IV, p. 1004.)

ポーモンによって描かれたルソーの「肖像」は、「非常に滑稽なもの」に仕上がっているという。つまり、ポーモンが教書のなかで描いてみせた「肖像」は、歪められて描かれているのであって、さらにその歪められた「肖像」はルソー本人の名誉を著しく傷つけるようなものに仕上がっているのだった。このように、論争作品にも「無実の存在」と「罪ある外観」の対立が見られるのである。

ところで、ルソーほど読者によって作品からその作者を曲解されてしま

った作家もいないのではないだろうか。いや、むしろそのように作家自身が思いこみ、そして自分の作品のなかでその苦悩を訴える作家も少ないように思われる。論争作品では、「私の本」と「私という人間」が「攻撃」（«attaquer», «blâmer», «abhorrer», «accuser», «censurer」）され、「名誉を傷つけられる」（«deshonorer», «diffamer», «flétrir», «altérer」）ことが問題になるのである。では、「私の本」と「私という人間」はいかなる関係にあるのだろうか。次の引用を見てみよう。

私は様々な主題について書きました。しかし常に同じ原理においてです。常に同じ道徳、同じ信仰、同じ行動基準、そしてもしお望みならば、同じ主義においてでした。けれども、人々は私の本に、あるいはむしろ私の本の作者に対して正反対の判断を下したのです。[...] 第一論文の後、私は思ってもいないことを証明して面白がる逆説好きの男でした。『フランス音楽に関する手紙』の後では、私は国民の公然の敵でした。私は危うく陰謀家扱いされるところだったのです。[...] 『不平等論』の後には、私は無神論者で人間嫌いでした。『ダランベールへの手紙』の後には、私はキリスト教的道徳の擁護者でした。『エロイズ』の後、私は優しく甘ったるかっただけです。今は不信心者です。やがて私はおそらく信心家になるでしょう。

こうして愚かな公衆は、私に関してなぜ彼ら以前私を愛したのかを知らないのと同様、今なぜ私を嫌悪するのかをほとんど知らず、ますます動揺を重ねています。私の方は常に同じ人間のままです。[...]
(*Lettre à Beaumont, OC, IV, p. 928.*)

ここでルソーは、『エミール』より前に書いた作品について考察しており、彼が作品を出版するごとに、公衆の目には毎回まったく違う姿の「ルソ

一」が映るということを述べている。このような公衆の反応に対してルソーは、これらの作品には常に「同じ原理」が貫かれており、それを書いている自分自身も常に「同じ人間のまま」であることを主張する。ところが、これは例の『エミール』断罪という事件以前の作品にとどまる。また、ここまでは論争に巻き込まれたとしても、名誉を著しく傷つけられるほどのものではなく、小説を公刊しても、作者自身がその主人公かと思われたにすぎないものであったと言える¹⁸⁾。読者が作者であるルソーを、彼の作品からつくり上げようとする外的な力が働いているため、これもある種の「歪曲」と見做せる。だが、『エミール』以前の作品までは、『社会契約論』や『エミール』とは異なり、ルソーを中傷し、名誉を傷つけていると声高に表明するほどのものではなかったと彼は言うのである。

では、上記の引用や注 18 で例に挙げた実際の書簡からも示せるように、読み手が「作品から（を通して）作者をつくり出す」という図式が、18 世紀当時のごく自然な読み方であると、ルソーがここで主張するとき、「私の本」と「私という人間」に対する攻撃に反論している『ボーマンへの手紙』と『山からの手紙』では一体何が問題なのか。作者にとっては「最も有益な作品」であり、読者にとっては「不敬度で最もひどい作品」という正反対の評価を得ている『社会契約論』、特に『エミール』は、なぜ外的な好奇心や論争という域をこえて、逮捕や焚書にまで至ったとルソーは考えるのだろうか。そしてルソー自身の名誉が傷つけられるとは一体どういうことなのか。

4. 『エミール』以降の「歪曲」

ルソー自身もまた、『エミール』以前と以後の作品と作者の扱われ方に区別を設けている。では、『エミール』以降、彼はどのように扱われたというのだろうか。

[...] あなたは私の命題をより厳しいものにするために、ご親切にも「つねに」という語を削除することから始めています。そうなさることは、私の命題を修正するだけでなく、それに別の意味を与えることになります。[...] こうしたささいな偽造を起こしたあとで、あなたは次のように続けられます。 [...]

猥下、あなたはご自分がこれほど厳しく名誉を傷つけている作品を大変軽く読んでいらっしゃる。いい加減に引用していらっしゃる。私は検閲を行う立場の人間は、自分の判断を下すにあたって、もう少し厳密な検討をするべきだと思います。（*Lettre à Beaumont*, OC, IV, pp. 948-949.）

『エミール』以前の作品では、作者であるルソー自身が公衆によって作品ごとに姿を変えられていたとルソーは述べている。ところが『エミール』断罪後の作品についての上記の引用を見ると、ルソーは、教書や『野からの手紙』の作者が、ルソー作品に対して言葉を削除したり、偽造するという「不正」を行っているという。つまり、読み手による理解不足¹⁹⁾だけでなく、ルソーの書物は読み手によって語を削られ、偽造される。さらに文章を違う場所から引用されたり、間違った引用がなされ²⁰⁾、書いてもいないこと、存在もしていない文章が書いてあると主張される²¹⁾。また、彼らはルソーの使っている語の曖昧さを利用し²²⁾、本それ自体をばらばらにしてしまおうとさえしている²³⁾。したがって、はじめに判断材料であるルソーの書物それ自体が姿を変えられ（「歪曲」され）、次に作者であるルソー自身に「大胆不敵 *téméraire*」、「不信心者 *impie*」、「ペテン師 *imposteur*」、「極悪人 *scélérat*」、「人間嫌い *misanthrope*」、「怪物 *monstre*」、「冒瀆者 *blasphémateur*」、「忌まわしい男 *un homme abominable*」などの判断が

下され(「歪曲」され)、ルソーをそのように描き出している不正まみれの作品が世間に向けて公刊されると言うのである。

要するに、彼らは原形をとどめていない「ルソーの本」から「作者ルソー」を批判し、ルソーが書いたものとは別物の作品から、それを書いたとされる作者ルソーを判断する²⁴⁾。それに対してルソーは、「最も有益である本」が、それを裁いた人々から壊されたからこそ、「最低の本」として攻撃されたのだと言い、自らの正当性を主張してやまない。相手の不正によって裁かれ、攻め立てられることは、彼にとって名誉を傷つけられることになるし、間違いなく不当なことなのである。

ここで一つ、この時期にルソーに送られてきた論争文に対するルソーの態度ついて、興味深い例を挙げよう。先述したように、特に「サヴォワの助任司祭の信仰告白」の宗教に対して多くの反駁文が送られてきた。ルソーは『ボームンへの手紙』と『山からの手紙』で、カトリックにもプロテスタントにも答えたので、その後の論駁文にもはや返事を書きたくないと思っていた。しかし、『ルソーの合理主義』(1948)の著者ロベール・ドゥラテによると、数多くの論争文のなかで一つだけルソーの目を引いたものがあるという。それはルフラン・ド・ボンピニャンというル・ピュイの司教が送ってきた論駁文であった。ドゥラテによると、「[...] おそらく彼[ルソー]は、ルフラン・ド・ボンピニャンがただより効果的にルソーの思想を論駁するために、彼の思想を歪曲しなかったこと (« n'avoir pas dénaturé sa pensée ») について、それ以上の感謝の気持ちを持っていたのである²⁵⁾」という。

この例から次の二つのことが分かる。一つは、論駁文を送ってくる人々は、書物のなかで述べられている彼の思想を曲解しているにもかかわらず、ルソーに攻撃を仕掛けているということ。そしてもう一つは、ルソー自身もそのことに対して失望を感じていたことである。だから、たとえ論駁文

であっても、自分の思想を「歪曲」せずに論破しようとしたボンピニャンに対してなら、ルソーは応じる気になったというのである。

だが、書物に対して加えられる「不正」だけに目を向けるだけでは事態は解決しない。公衆は自ら直接作品を手取ることなく、論駁者らが公刊した誤った言説から、あるいはそれに影響された新聞などの情報を伝達するものから、さらには単に評判や噂から作品を知り、間接的に作者ルソーを知ることになる。このようにして伝わるものは、すでに本物とは異なった『『エミール』』であり、「作者ルソー」である。そして『エミール』以前の作品群からもすでに見られるように、公衆は「作品」からその「作者」を見ようとする力が働くのだから、間違った物——本——から、間違った者——作者——を知ることになり、二重に誤りを犯すことになるのである²⁶⁾。読者はルソーが書いていない外的な言説から彼を判断してはならない。自らが彼の作品を手に取り直接的に、そして正確に作品を理解しなければならない。しかしながら、人の手によってすでに歪められている「ルソー」作品の評が公刊され、「ルソー」の人物像までもが提示されるのである。つまり、これらの論争作品においては、注16で示したように、本と作者をそれぞれ攻撃することよりも、本から（を通して）作者を攻撃することの方が問題となるのである。こうしてルソーの論敵たちは作品を間違っ「引用 citer」し、作者ルソーを誤って「召喚する citer」のだった²⁷⁾。

このような不正が問題になるにもかかわらず、『野からの手紙』の作者はさらなる偽装——「歪曲」——を行っている。この作者は、ルソーの本を壊し、実際には害のない本を犯罪の証拠に仕立て上げるだけでなく、作家としての「間違い *faute, erreur*」をしたかもしれないが、「罪 *crime, délit*」を犯してはいないルソーを「犯罪者 *un malfaiteur*」に仕立て上げ、「逮捕 *prise de corps*」しようとしているのである²⁸⁾。いくらルソーが命よりも名

誉を重んじると作品に書こうとも、逮捕は現実に命の危険をもたらす死活問題と言えるだろう。

5. 無実の証明

しかしルソーは無実なのである。彼は誠実に真理を述べてきただけなのである。それに対し、『野からの手紙』の作者はルソーを犯罪者にすることを正当化するために、本を通して作者を攻撃し、彼の名誉を傷つけ、彼の命を危険に晒していることを認めない。それどころか本と作者の間に区別を設けるふりをすることによって、『エミール』は焚書の憂き目にあったが、作者であるルソーにはまだ「弁護と抗弁 *ces exceptions et défenses*」が残っていると言い、自分たちの不正に対して白を切り続けている。

だが、それに対してルソーが書物と作者について考えていたのは、両者は互いに切り離すことができない関係で結ばれているということだ。しかも彼にはそのことを証明できる確固たる「証拠」があるという。ではその「証拠」とは何であろうか。

[...]、一人の不器用な作家、つまり自分の義務を知り、それを遂行しようとする作家が、自分で認めていないこと、自分の名を名乗れないこと、自分で責任を取るため姿を現せないことを公衆に何一つ語ってはならないと信じているとき、[...] それ [公正さ] は書物の主義主張と作者の主義主張とを分離しないことを望むのです。なぜなら彼は自分の名前を載せることでそれらを分離したくないと宣言しているからです。公正さは、返答のできない作品を、作品にかわって返答する作者の意見を聴いたのちにしか裁けないことを望むのです。したがって匿名の本を有罪にする場合には、確かにその本だけを有罪にすることにしかありません。しかし作者の名前がある本を有罪にすれば、作

者自身も断罪することになるのです。[…] (*Lettres écrites de la Montagne*, Lettre V, OC, III, pp. 792–793.)

その「証拠」とは、「本に名を載せる」ことであるとルソーは言う。そしてこの「証拠」こそ、彼が無実であることの明白な「証拠」でもあるのだ。

「本に名を載せる」という行為は18世紀の出版事情と併せて考えると、非常に危険な行為であると考えられる。というのは、18世紀の出版に関する法律は厳密なものであり、王権、高等法院、大司教（教会）の三大権力（もちろん王権が最も強いものではあるが）が互に対立しながら本の出版を統制しており、これらの権力が危険と見做す思想を含む作品や、それらを書いた作者は厳しく罰せられていたからである。だが18世紀のフランスの読者は「権力」が差し止めるに違いないはずの書物を読んでいて、なぜならオランダを筆頭に、国外での印刷、地下出版や黙認というさまざまな形で本は流通していたからである。また多くの作家は、名目上は作者を特定できない「匿名」という方法もとっていた。それはヴォルテールがフランソワ・マリ・アルーエという本名ではなく、ペンネームを用いて活躍の場を広げていたことから推察できるだろう。

このような危険が作家を取り巻き、そして作家自身もその危機に対して予防線を張っていたまさにその時代に、「不器用な作家」（« un auteur maladroit »）であるルソーは、一般的な「匿名の本」（« un livre anonyme »）を「利害や野心の動機」（« des motifs d'intérêt ou d'ambition »）、党派の精神（« l'esprit de parti »）、憎しみ（« la haine »）に基づいて書かれた「悪書 un mauvais livre」であると見做し、それに対して、自分の著作も含めて名を載せている本を、「善良な意図」（« dans de bonnes vues »）で書かれ、「自分が知っている真理をそこ [本のなか] で述べ、自分が愛する善を探し求めている」（« on y dit la vérité qu'on sait, on y cherche le bien qu'on aime »）

という「良書 *un bon livre*」として、悪書と区別している²⁹⁾。

命の危険まで冒しながらも、本に名を載せることによって、作者と書物は分かちがたい関係で結ばれるというのがルソーの主張なのである。そしてまた、彼は「本に名を載せる」という行為を « *pratiquer* » や « *machiner* » と対比することで、名を隠して出版する「匿名の本」を非難しながら、正々堂々としている行為と見做してもいるのである³⁰⁾。

要するに、ルソーは自分の作品のなかで常に自分の信ずる「真理 *la vérité*」を述べてきたが、その真理は危険を冒しながらも自分の著作に自分の名前を付すという「行為」によって保証されていると主張する。そしてそのような本に罪などあるはずもなく、その作者は無実であるというのである。確かにこれは、実際に読者がルソーは真実しか述べていない、と信じるかどうかとは別問題だろう。しかしルソーはこのような行為こそ、自分が誠実であり、真実を述べていることの保証となり、人々に信じさせることができる方法であると考えていたのだった。

6. おわりに

ルソーはもはや人間だけから「歪曲」されているのではない。注1を改めて参照していただきたい。『エミール』が多数の機関から追われる作品であることはすでに指摘した。これらの機関とは、宗教、法律、王権、国家であり、「権威 *l'autorité*」の象徴である。パリの大司教であるポーモンによって教書が出されたことから分かるのは、ルソーがカトリックから敵視されたということだ。また、ジュネーヴ内において『野からの手紙』が書かれたことは、彼がプロテスタントからも敵視されていたことの証明にもなる。ルソーはキリスト教のプロテスタントとカトリックの両派、いわば「宗教」から否定されるのである。また、パリの高等法院やジュネーヴ評議会が『エミール』や『社会契約論』を焚書処分にし、ルソーに逮捕状

を出したことは、彼が法的な権力からも敵視されていることのあらわれである。そのうえルソーは逃亡に逃亡を重ねなくてはならない。フランスにもスイスにも彼の居場所はないのである。彼は「国」にいることさえも許されない。このような実際の状況が作品内にも明確に示されるようになる。例えば「[...] 名誉を傷つけられ、追放され、国から国へ、隠れ家から隠れ家へと追跡された神の大義の擁護者 [ルソーのこと] は、彼の赤貧に対する考慮や、彼の持病に対する憐れみもなく、いかなる犯罪者もかつて経験したことがなく、また健康な人間に対してさえ残酷であるような仮借のなさをもって、ほとんど全ヨーロッパにおいて火も水も禁じられるといった有様」(*Lettre à Beaumont, OC, IV, p. 931.*) で過ごさなくてはならない、という文を挙げることができる。彼は悲惨な状態の自分と自分以外の「すべて tout」を対置している。そして彼は「すべて」に対して、無罪を勝ち取るために闘わなくてはならないのである。

以上のように、論争作品では作者である自分と切り離すことができない作品そのものを変質されたからこそ、ルソーは作者である自分自身が「ペテン師」、「不信心者」、「犯罪者」などと非難の対象にされ、名誉を傷つけられていると考えている。そうでなければ、正々堂々と本に名を載せるといふ目に見える行為から明白のように、危険を冒してまで真理を述べている自分が疑われるはずもなければ、自分の義務を遂行しようとする人間が書いた作品が、彼らから形容されているようなひどいものであるはずがないからである。

これらの論争作品で、ルソーは自分の「誠実さ」を強調している、と言い得るのは、このように彼があらゆるものから多数の姿に「歪曲」されたからなのであり、だからこそ「歪曲」されることもまた、「誠実さ」とともに自伝的な一側面と言えるのである。

註

- 1) 『エミール』と『社会契約論』(とりわけ『エミール』)が引き起こした影響が、当時のヨーロッパにおいていかに大きかったかを示すために、両者に対する処罰の詳細を記しておく。1762年5月27日、『エミール』がフランスで発売される。『エミール』は6月3日、警察に没収され、5日に『社会契約論』と『エミール』がジュネーヴで販売されるも、『エミール』は7日にはソルボンヌによって告発される。次いで9日、パリの高等法院は『エミール』を発売禁止にし、その作者であるルソーには逮捕命令を下す。11日、パリでは『エミール』が焼かれ、ジュネーヴでは『社会契約論』とともに封印処分となる。19日にはジュネーヴでもこの二冊は焚書の憂き目を見ることになり、作者には逮捕命令が下りる。7月1日には、ベルヌ領のイヴェルドンに身を落ちつけていたルソーに対して、ベルヌ政府から立ち退きが要請され、9日にイヴェルドンを発って、10日にヌーシャテル公国のトラヴェール溪谷のモチエに向かい、8月16日によくヌーシャテル領地内に滞在することをプロイセン国王フリードリヒ二世から許されるのである。
- 2) Frédéric S. Eigeldinger, « Préface des *Confessions* du manuscrit de Neuchâtel », in *Bulletin de l'Association Jean-Jacques Rousseau*, No. 59, 2002, pp. 23–27. 1674年から書き始められていた『告白』は「ヌーシャテル草稿」と呼ばれ、決定稿である「ジュネーヴ草稿」とは区別される。
- 3) Hermine de Saussure, *Rousseau et les manuscrits des Confessions*, Paris, Boccard, 1958, pp. 17–23.
- 4) 実際はヴォルテール(本名フランソワ・マリ・アルーエ) François Marie Arouet, dit Voltaire (1694–1778) 著。1764年12月27日出版。
- 5) Hermine de Saussure, *op. cit.*, pp. 15–16.
- 6) Jean-Marie Goulemot, « Pourquoi écrire? Devoir et plaisir dans l'écriture de Jean-Jacques Rousseau », in *Romanistische Zeitschrift für Literaturgeschichte*, IV, 1980, pp. 222–223.
- 7) ルソーのテキストは、Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I–V, 1959–1995 を使用している。引用の際には、「題名、(第…巻、第…の手紙等)、プレイヤード版全集、巻数、頁数」を以下のように略記し(例: *Les Confessions*, Livre I, OC, I, p. 5.)、現代の表記法

に改めている。以降、特記しない場合の下線は論者によるものとする。

- 8) Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau : la transparence et l'obstacle*, Paris, Gallimard, 1971, pp. 13–21. (イタリック強調は原典による。)
- 9) *ibid*, p. 19.
- 10) Alain Grosrichard, « Présentation », in Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions I*, Flammarion, Paris, 2002, p. X.
- 11) *ibid*, p. XXVI.
- 12) *ibid*, pp. VI–XXVI.
- 13) 例 えば、« Une autre difficulté me l'a rendu fatigant ; c'étais, forcé de parler de moi sans cesse, d'en parler avec justice et vérité, sans louange et sans dépression. [...] celui qui se sent digne d'honneur et d'estime et que le public défigure et difame à plaisir, de quel ton se rendra-t-il seul la justice qui lui est due? Doit-il parler de lui-même avec des éloges mérités, mais généralement démentis? Doit-il se vanter des qualités qu'il sent en lui, mais que tout le monde refuse d'y voir? Il y aurait moins d'orgueil que de bassesse à prostituer ainsi la vérité. », *Dialogues*, Du sujet et de la forme de cet écrit, *OC*, I, pp. 664–665 が挙げられる。
- 14) ボームンは教書のなかで、実際にルソーを« un athée »（「無神論者」）、« cet imposteur »（「このペテン師」）などと形容し、最終的に『エミール』を以下のように断罪している。
« [...] nous condamnons ledit livre comme contenant une doctrine abominable, propre à renverser la loi naturelle et à détruire les fondements de la religion chrétienne ; établissant des maximes contraires à la morale évangélique ; tendant à troubler la paix des États, à révolter les sujets contre l'autorité de leur souverain ; comme contenant un très grand nombre de propositions respectivement fausses, scandaleuses, pleines de haine contre l'Eglise et ses ministres, dérogeantes au respect dû à l'Écriture sainte et à la tradition de l'Eglise, erronées, impies, blasphématoires et hérétiques. », « Mandement », in Jean-Jacques Rousseau, *Lettre à Monsieur de Beaumont*, Lausanne, L'Age d'Homme, 1993, p. 42.
- 15) 実際はジャン＝ロベール・トロンジャン Jean-Robert Tronchin (1710–93) 著。
- 16) 『ボームンへの手紙』、『山からの手紙』では、このような話題が幾度か繰り返される。一例として以下の文章を挙げることができるだろう。
« Mais voici comment vos Messieurs et lui tournent la chose pour autoriser le jugement rendu contre mes livres et contre moi. Ils me jugent moins comme chrétien que comme Citoyen ; ils me regardent moins comme impie envers Dieu que comme

rebelle aux lois ; ils voient moins en moi le péché que le crime, et l'hérésie que la desobéissance. J'ai, selon eux, attaqué la Religion de l'État ; j'ai donc encouru la peine portée par la loi contre ceux qui l'attaquent. Voilà, je crois, le sens de ce qu'ils ont dit d'intelligible pour justifier leur procédé. », *Lettres écrites de la Montagne*, Lettre II, OC, III, p. 712.

- 17) 第一論文に対して、1751年から1753年の間に賛成論も含めて67にもわたる論説が無名であったルソーへと向けられた。(ジャン＝ジャック・ルソー『学問芸術論』、前川貞次郎訳、東京、岩波、1968年、237-238頁。)それに応じるルソー作品は、例えば『スタニスラス王への回答』*Réponse à Stanislas* (1751)や『グリム氏への手紙』*Lettre de Jean-Jacques Rousseau à M. Grimm* (1751)などが挙げられる。

今回扱う論争作品と、かつての論争作品との違いについて一言付言すると、第一論文後の論争作品においても彼は自己弁護をしているが、「作家としての誠実さ」を守ろうとしているのであって、本稿で取り扱う論争作品ほど「個人的」なものではなかったという。(Hermine de Saussure, *op. cit.*, pp. 10-11.)

- 18) 一例として、ルソーと一般読者であるド・ラ・トゥール夫人の間には、『新エロイズ』の登場人物であるサン＝ブルーとジュリという形で書簡のやりとりが始まり、15年以上、180通余りの書簡のやりとりがなされたことを挙げられる。(桑瀬章二郎「ある婦人の肖像—ルソー—ド・ラ・トゥール夫人書簡における自己のフィギュール」、『立教大学フランス文学』、第36号、東京、立教大学フランス文学研究室、2007年、1-36頁。)

- 19) 例えば以下の記述が参考になる。

« Toujours avec l'arrangement de censurer sans entendre, vous passez d'une imputation grave et fautive à une autre qui l'est encore plus, [...], et le seul endroit de votre Mandement où vous ayez raison, est celui où vous réfutez une extravagance que je n'ai pas dite. », *Lettre à Beaumont*, OC, IV, p. 953.

- 20) 例えば以下の記述が参考になる。

« Mes propositions ne pouvaient faire aucun mal à leur place ; elles étaient vraies, utiles, honnêtes dans le sens que je leur donnais. Ce sont leurs falsifications, leurs subreptions, leurs interprétations frauduleuses qui les rendent punissables : [...] », *Lettres écrites de la Montagne*, Lettre I, OC, III, p. 707.

- 21) 例えば以下の記述が参考になる。

« Or vous avez tort d'avancer que l'unité de Dieu me paraît une question oiseuse et

supérieure à la raison ; puisque dans l'écrit que vous censurez, cette unité est établie et soutenue par le raisonnement ; et vous avez tort[...]», *Lettre à Beaumont*, OC, IV, pp. 957-958.

22) 例えば以下の記述が参考になる。

« N'y aurait-il point ici quelque nouvelle équivoque, à la faveur de laquelle on me rendit plus coupable ou plus fou que je ne suis[...] Voyons : la méthode favorite de mes agresseurs est toujours d'offrir avec art des idées indéterminées ;[...]», *Lettres écrites de la Montagne*, Lettre I, OC, III, p. 703.

23) 例えば以下の記述が参考になる。

« Combien de fois les auteurs diffamés et le public indigné n'ont-ils pas réclamé contre cette manière odieuse de déchiqueter un ouvrage, d'en défigurer toutes les parties, d'en juger sur des lambeaux enlevés ça et là au choix d'un accusateurs infidèle qui produit le mal lui-même, en le détachant du bien qui le corrige et l'explique, en détournant par tout le vrai sens? », *Lettres écrites de la Montagne*, Lettre I, OC, III, pp. 707-708.

24) 例えば以下の記述が参考になる。

« Monseigneur, c'est souvent un petit mal de ne pas entendre un auteur qu'on lit ; mais c'en est un grand qu'on le réfute, et un très-grand quand on le diffame. Or vous n'avez point entendu le passage de mon livre que vous attaquez ici, de même que beaucoup d'autres. Le lecteur jugera si c'est ma faute ou la votre quand j'aurai mis le passage entier sous ses yeux. », *Lettre à Beaumont*, OC, IV, p. 949.

25) Robert Derathé, *Le rationalisme de Jean-Jacques Rousseau*, Paris, Presses universitaires de France, 1948, p. 147.

26) 例えば以下の記述が参考になる。

« J'ai tâché, Monseigneur, de vous faire entendre dans quel esprit a été écrite la Profession de foi du vicaire savoyard, et les considérations qui m'ont porté à la publier. Je vous demande à présent à quel égard vous pouvez qualifier sa doctrine de blasphématoire, d'impie, d'abominable, et ce que vous y trouvez de scandaleux et de pernicieux au genre humain ? J'en dis autant à ceux qui m'accusent d'avoir dit ce qu'il fallait taire et d'avoir voulu troubler l'ordre public ; imputation vague et téméraire, avec laquelle ceux qui ont le moins réfléchi sur ce qui est utile ou nuisible, indisposent d'un mot le public crédule contre un auteur bien intentionné. [...]

Voilà pourtant ce qu'on persuade au peuple quand on veut lui faire prendre son défenseur en haine, et qu'on a la force en main. Maintenant, hommes cruels, vos

décrets, vos buchers, vos mandemens, vos journaux le troublent et l'abusent sur mon compte. Il me croit un monstre sur la foi de vos clameurs ;[...]», *Lettre à Beaumont, OC, IV, p. 983.*

- 27) 『ポーモンへの手紙』や『山からの手紙』では、「引用する」(« citer »)と「(法廷に) 召喚する」(« citer »)という言葉が併せて使用されている。特に『山からの手紙』では後者の使い方が多く見られる。
- 28) 『山からの手紙』の第一の手紙でルソーは、自分は作家としての誤りをしたかもしれないが、罪を犯してはいないことを繰り返し述べている。そしてそれに伴い、自分は犯罪者ではないことも、逮捕状の不正性も主張しており、本文に挙げた言葉が繰り返される。
- 29) *Lettres écrites de la Montagne, Lettre V, OC, III, pp. 791-792* の要約。
- 30) « Mais quelles sont donc ces pratiques et machinations dont on m'accuse ? *Pratiquer*, si j'entends ma langue, c'est se ménager des intelligences secrètes ; *machiner*, c'est faire de sourdes menées, c'est faire ce que certaines gens font contre le christianisme et contre moi. Mais je ne conçois rien de moins secret, rien de moins caché dans le monde que de publier un livre et d'y mettre son nom. Quand j'ai dit mon sentiment sur quelque matière que ce fût, je l'ai dit hautement, à la face du public ; je me suis nommé, et puis je suis demeuré tranquille dans ma retraite : on me persuadera difficilement que cela ressemble à des pratiques et machinations. », *Lettres écrites de la Montagne, Lettre IV, OC, III, p. 757.*

つまりここでルソーは、「密かに *secrètes, secret*」「暗黙裡に *sourdes*」「隠れた *caché*」行為である「内通や策謀」と、公衆の前で声高に意見を表明し、本に名を載せるという自分の表立った行為とを比較しているのである。

L'aspect autobiographique dans les œuvres polémiques :

Une réflexion sur la *Lettre à Christophe de Beaumont* et les *Lettres écrites de la Montagne*

DOBASHI, Yuriko

Le 9 juin 1762, le Parlement de Paris a condamné l'*Émile* et décrété son auteur en état d'arrestation. Pour prouver son innocence, Rousseau écrit la *Lettre à Beaumont* et les *Lettres écrites de la Montagne*. Ces œuvres polémiques sont autobiographiques, car J-M Goulemot dit : « Par elle [*Lettre à Beaumont*] Jean-Jacques se propose, non de dire la vérité, mais de rétablir la vérité de son être et de sa pensée déformée par le prélat. » Certes, il avait déjà écrit des œuvres autobiographiques mais « la *Lettre à Beaumont* marque la rupture. » Or, quand on examine les aspects autobiographiques, s'agit-il de vérité ou de bonne foi ? Doit-on envisager ce qui est déformé ou défiguré ?

On réfléchira, d'abord, au rapport entre ces œuvres polémiques et *Les Confessions*. Dans *Les Confessions* : « je savais qu'on me peignait dans le public sous des traits si peu semblables aux miens et quelquefois si difformes que malgré le mal, dont je ne voulais rien taire, je ne pouvais que gagner encore à me montrer tel que j'étais. » Quand Rousseau décide d'écrire ses Mémoires, il se montre « tel que je suis » et « difforme », de plus, ce qu'il était défiguré importe dans les *Dialogues*.

Ensuite, considérons les différences de méthode du "défigurer" entre avant et après la condamnation de l'*Émile*. Avant la condamnation, quand Rousseau publie ses œuvres, il est considéré comme « un athée » ou « un homme doux » etc, par le lecteur, à sa fantaisie. Mais pour l'*Émile*, premièrement, ses critiques arbitraires déchiètent le livre : omission de mot, fausses citations... Deuxièmement, ils le jugent à travers l'*Émile* déformé, alors il passe pour « un monstre » ou « un scélérat », etc. Bien que leurs démarches soient injustes, il est condamné.

Rousseau, cependant, veut prouver son innocence lui-même, parce qu'il possède la preuve absolue : son nom sur la couverture de ses livres. Ce simple fait est très dangereux et extrêmement courageux au XVIII^e siècle. Par conséquent,

cette action prouve son innocence et sa sincérité.

Bref, l'*Émile* est détruit, et de nombreuses images fausses créées par ses ennemis circulent sur Rousseau. Il lui faut reconquérir son « tel que je suis » dans ses œuvres et son autobiographie.

(人文科学研究科フランス文学専攻 博士後期課程 1 年)